

知的基盤の形成

長島 昭

慶應義塾大学工学部
システムデザイン工学科教授



人間の文化は数値化できるものとできないものから成っているという。思想や芸術など、数値化できないものに文化の本質があり、価値があるというのが、多くの人の信条であって、筆者も反対ではない。しかし、特にこの百年ばかりは、数値化できる部分の進歩が貢献して、現代社会ができあがってきた。

数値化できる部分は、時代と共に付加・形成されてきたために、重複や欠如や関係不明があって、これからの発展に無駄や障害や不足を生じている。今あらためて整理し、欠けている部分を重点的に充実させていく必要がある。これが、データベースやネット情報だけでなく、広い意味の知的基盤を整備していく第一の意義である。

最近、知的財産の重要性が強調されている。私たちの頭脳で考えた成果を大切にし、その利用を制限して経済効果と結びつけていこうということである。少し下がって考えると、もうひとつの側面に思い至る。人類の頭脳の成果は、人類共通の財産であって、できるだけ平等に、できるだけ早く公開・普及しなくてはならない。学術的成果は、万人に利用できることで、次の世代の成果が生まれる。これが知的基盤のもうひとつの役割である。「財産」と「基盤」は知的成果の尊重であっても、この点では相反する側面もある。

数値化できる文化とできない文化、あるいは知的財産と知的基盤、これらは両方重要ではあっても、いつも同じということではない。時代の移り変わりに従ってウエイトの置き方が違ってよい。常に両方に目が届いていることが重要なのである。

数値化できる文化を支えるもの、そして知的基盤の中核を成すひとつが計量標準である。産業、科学技術、社会を支える知的基盤には、国際性は欠くことが出来ない。